

聖書

聖書探求に旅立つ

私たち“ヨシエル”の群れ

創世記22：1-19

→ 8 ひな型

「ひな型」の代表ともいえる、“アケダー” ヘブル語で「縛る」の意
—アブラハム、息子イサクを捧げる— の出来事

神はアブラハムに、一見不可解な要求をされた
—「一つの山の上で」、イサクをいけにえとして捧げなさい—

アブラハム、
神の御命令を聞くや、直ちに翌朝早くに、四人で「モリヤの地」に出かけた
目的地「モリヤの山」まで、三日かかった
アブラハム、山のふもとで二人の若者に「私と子どもは...戻って来る」と言い残した

アブラハムの長男イシュマエル、イサクより十四年前に生まれていた
しかし、神はイサクを「あなたの愛しているひとり子」と呼ばれた

→ 7

アブラハム、イサクに「神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださる」（下線付加）と
答えた

神ご自身が備えられるいけにえ、神ご自身のみが「身代わり」

⇒この出来事からほぼ千九百年後

「いけにえの小羊」、人類の罪の身代わりに ヨハネ3：16

いけにえ

アダムとエバが罪を犯したとき、神、「いけにえの動物の血による罪の贖い」を教えられた
創世記3：21、4：4

⇒最初のいけにえ導入からほぼ二千五百年後、モーセ、旧約の律法を成文化

「レビ人によるいけにえ制度」は一時的で、究極的、完璧ないけにえの到来を眺望

ヘブル人9：26

旧約の「いけにえ制度」は神の原則：「血の注ぎがなければ罪の赦しはない」を

達成する「唯一真のいけにえ」の「ひな型」に過ぎなかった レビ記17：11、ヘブル人9：22

⇒新約時代に生きる者たちの特権

二千年前、キリストの贖いの死によって、全人類に開かれた救いの道

三十歳の壮年期に達していたイサク、全焼のいけにえのためのたきぎを背負い、
父アブラハムの信仰を理解し、従順に指示に従った

ユダヤ教、—ナザレ人イエス・キリストをヤーウェの約束されたメシヤとはみなさない— では、
イサクは三十歳の壮年

アブラハム、神が身代わりを提供してくださった場所を「アドナイ・イルエ」と名づけた
アブラハムには、「神の備え」と「甦りの生命」に対する確かな信仰があった
創世記17：19、21：12、ヘブル人11：17-19

三日間

神からの命令を受けた（1－2節）後、いけにえを捧げるために山に向かい、御使いによって神の要求から完全に解放される（11－13節）までの間、アブラハムにとって、イサクは死んだも同然

⇒イエス・キリストを人類の罪の呪いの下に放たれた、父なる神の苦しみの三日間
アブラハムがイサクを捧げるという歴史的出来事“**アケダー**”は、父なる神が子を捧げるという、人類救済のための究極的な出来事の「ひな型」

13節で、イサクの代わりに、いけにえとして雄羊が与えられた後、アブラハムはそれを捧げた

⇒藪に角をひっかけて、もがいている一頭の雄羊、
いばらの冠をかぶせられ「**神の小羊**」として、十字架刑に処せられたキリストの「ひな型」

そのとき、神を最後まで信頼し続けたアブラハムに、神からの大いなる祝福の約束、
永久の約束とこしえが与えられた

19節で、アブラハムは山を下り、若者ととともにベエル・シェバに行き、そこに住んだ
創世記21：31－34

しかし、不思議なことに、イサクには何も言及されていない
当然推測できることは、イサクも三人とともに、すなわち四人が無事に下山し、
ベエル・シェバに戻ったということ
しかし、聖書はそのようには語っていない！

この話には解決編がある

創世記24章

アブラハム、最年長の家令を、イサクの花嫁探しに、アブラハムの郷里に送った
「最年長の家令」とは？

アブラハムに世継ぎがない場合、アブラハムの財産、所有物をすべて受け継ぐことになる
相棒（同労者）のことで、「奴隷」の意の「しもべ」ではない
この家令の名は先行する文脈から「**エリエゼル**」

創世記15：2 アブラハムの「**家の相続人**」候補

⇒この名は「**助け主**」の意 ヨハネ16：13「**真理の御霊**」、14：26

家令、ナホルの町の井戸のかたわらで、花嫁候補リベカに会う

イサク、家令を通して、花嫁リベカと出会い、結婚する

⇒花婿キリストは父なる神から遣わされた「**聖霊**」を通して、花嫁なる教会に出会い、
再臨のとき、教会と結婚する
家令エリエゼルは、まさしくその名の通り、**聖霊の「ひな型」**

再び、22章19節の時点に戻ると、
あたかもイサクが消えてしまったかのようなようである

イサク個人の記録は、“アケダー”の出来事の後、
24章62節で花嫁リベカと出会うまでの間、—24章まで、二章の間—
この書の編集からはずされてしまったかのようなようである
イサクは、結婚直前まで、姿を現さなかった！

聖書

⇒この編集は、あたかも、後世、大々的に実現する出来事に一致するようにと、意識的、綿密に構成されたかのよう

来るべき最高潮の出来事とは何か？

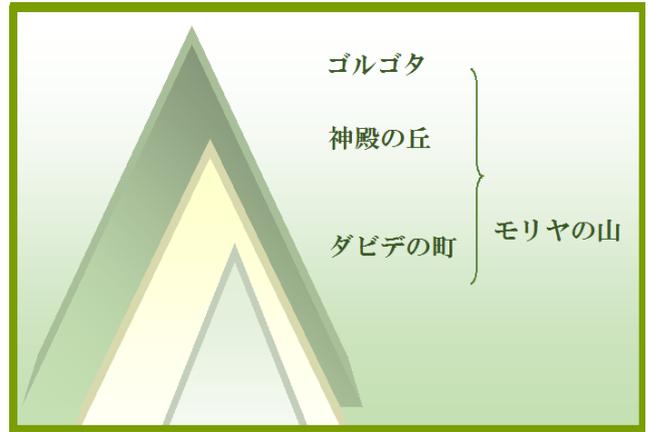
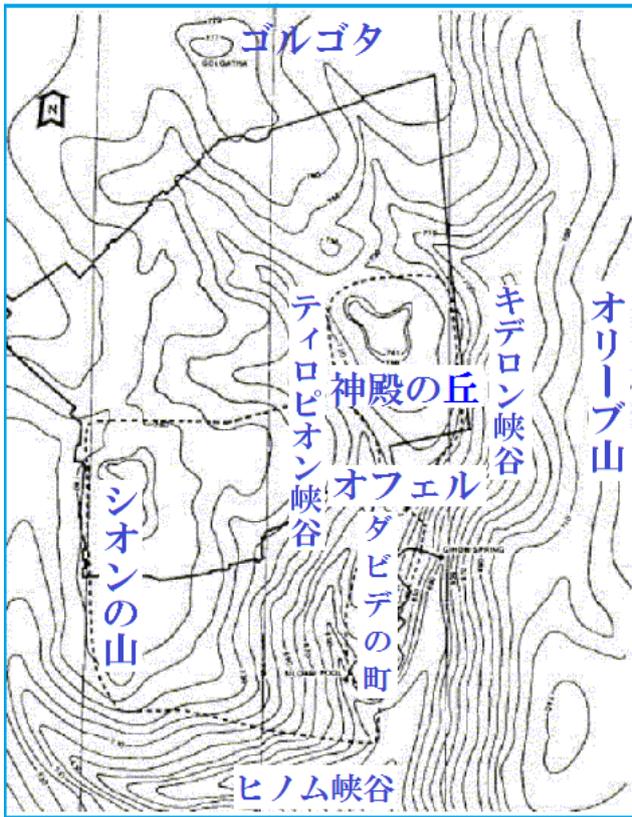
甦り後、この世から天上に戻られたキリストが再び地上に来られる「再臨」のときに起こる、「花婿キリストと花嫁『教会』との結婚」

キリストはこのことを、生前も甦り後も何度も、弟子たちに語られた

創世記22：1－19

“アケダー”の出来事の起こった場所

→ 2 地形学的視点
9 同目的



「モリヤの山」の地形

モリヤの山は、東のオリーブ山と西のシオンの山との間に、うね状に隆起した丘

東にはキデロンの谷、

歴代誌第二29：16、ヨハネ18：1

西にはティロピオンの谷、

ネヘミヤ記2：13、11：3で言及されている「谷」

南にはヒノムの谷が

走っている

山の尾根は南部で海拔600mで始まり、北方に向けて、次第に高くなっている
このふもとは、祭司であり王であったメルキゼデクの町「シャレム」 創世記14：18-20
後に「オフエル」、ダビデの町と呼ばれ、
さらに後には「エルサレム」と呼ばれるようになった

さらに尾根を上っていくと、ほぼ740mの峠
後にオルナンが所有するようになった「打ち場」で、
ダビデが「主のために祭壇を築く」ため、オルナンからその地を買い、サムエル記第二24：15-25
「**ダビデの指定した所に**」、ソロモンがエルサレム神殿を築いた 歴代誌第二3：1

打ち場

収穫した穀物からもみ殻を取り除くの（脱穀）に好都合な強い風の吹くところ
このオルナンの「打ち場」が、「神殿の丘」と呼ばれるようになった

モリヤの山の「頂上」はもう少し北方の約777mの地点
ここは、後に、ゴルゴタ「**どくろの地**」と呼ばれるようになった ヨハネ19：17

ソロモンの神殿奉献からほぼ千年後、イエス・キリストは、この場所で十字架刑に処された
キリストの死は、多くの預言を成就した イザヤ書53章、詩篇22篇

アブラハムが神のお言葉に従って、イサクを捧げようとした“アケダー”の出来事から
ほぼ二千年後のことであった

